１－５　３年生の活動実績

（１）主に主体性・自己認識を高める活動【実施計画Ⅰ】

①恩返し探究　ぬいぐるみ制作(10 月９日～１月 15 日　全 11 回)

（目的）

・これまでお世話になった松浦市（ふるさと）に卒業前に何か恩返し活動ができないかを考え、それを実践する。

・本校ルーブリックによる評価の最終項目である、「ふるさと貢献力」を高める。

(内容)

■10 月９日　実施内容について協議・検討

■10 月 16 日／23 日／11 月６日　校内企画会議

■10 月 30 日　地域清掃(志佐川沿い)

■11 月 13 日～　エミネントスラックス工場見学＆生地受け取り後に作業開始

■感謝の気持ちをこめて松浦市に贈呈（贈呈式）

「まつナビ」協力 市に感謝

手作り縫いぐるみ、クッション贈る

松浦高3年生 ふるさとに「恩返し」

松浦市志佐町の県立松浦高（舟越裕校長、180人）の3年生が、手作りの縫いぐるみとクッション計32個を市に贈った。生徒が地域の課題解決に取り組む授業「まつナビ」に協力している市へ感謝の意を示そうと製作した。子育て支援施設や幼児健診の場で活用される。

手づくりした縫いぐるみやクッションを手に笑顔を見せる松浦高の3年生ら　＝松浦市民福祉総合プラザ

松浦高は市と協働して2017年度から「まつナビ」を開始。地域おこしや農業、観光、交通などの分野で課題解決に取り組み、22年度に全国初の「地域科学科」が設置されるきっかけになった。

縫いぐるみとクッションの贈呈は、地域科学科の1期生を含む3年生40人が、「ふるさと恩返し」をテーマに、最後の探究活動の一環として昨年10月から今月にかけて取り組んだ。製作には志佐町のスラックス専業メーカー、エミネントスラックスが協力。材料に生地の切れ端を提供し、ミシンの使い方や手縫いの方法を社員が教室に出向いて指導した。

エミネントスラックスの社員（右）から縫製技術を学ぶ生徒　＝昨年12月11日、県立松浦高

贈呈式は15日に市内であり、生徒を代表して、[illegible]さん（18）と[illegible]さん（18）があいさつ。全ての作品に綿の代わりに生地の切れ端を詰めたと説明し、見た目より重さのある仕上がりを「ふるさとに感謝する思いの強さ」と語った。

宮原宗尚副市長は「まつナビで学んだ3年間を糧に自分の夢を実現してもらいたい」とエールを送った。

（則行優志）

■長崎新聞　令和７年１月 21 日

②地域ボランティア参加

・「松浦水軍まつり」／日時：10 月 26 日(土)・27 日(日)／場所：松浦市文化会館

・「松浦こども博」／日時：11 月３日(土)・４日(日)／場所：松浦市文化会館

・「こども食堂」／日時：11 月 30 日(土)／場所：志佐小学校

■こども食堂

■松浦水軍まつり

１－６　地域素材を活用した授業実践

「地域科学科」としての特色をより一層明確にし、地域課題探究学習と教科学習との関連を強めるための取組として、以下の内容で令和５年度から取り組み始めた。

（１）目的

地域との連携による教育活動の充実を図り、生徒の地域に対する理解を促し、地域への愛着を増進するため、各教科（国語、地歴公民、数学、理科、英語、保健体育、商業）において、地域を素材とした授業開発を進める。

（２）計画

・年度当初は各教科で開発する授業概要（単元、時期など）について検討する。

・授業構想に目処がついた段階から、長崎大学教育学部の各専門領域の先生方に助言をいただく。

・文部科学省の研究指定を受けている令和５、６年度の２年間、授業開発を進める。

・令和７年度から、学校設定科目（１年生１単位）とする。

（３）令和６年度の実施内容

教科	授業内容	授業の目的	まつナビとの関連	学年	実施	長崎大学・外部組織等からの支援
国語	○「言語文化」で実施 ○松浦市と他地域の民話を比較し、それらの起源についての学習を通して、民話の存在意義について考える。	松浦に多くの民話が残されていることを知り、地域への興味関心を高める。	探究 テーマ	１年	12 月 19 日 1 ｺﾏ	教育学部 吉良史明 准教授
地歴公民	○「まつナビ」の時間で実施 ○志佐中学校３年生と合同で「ふるさと」を教材としたワークショップを実施。生徒は事前に「マンダラチャート」で松浦の強みと課題を考える。	「まつナビ・プロジェクト」と教科横断的な授業を展開することで、ふるさと貢献力の醸成を図る。	探究 スキル	２年	12 月 11 日 2 ｺﾏ	多文化社会学部 アレーナ・ イナキナイ助教
数学	○「数学Ⅰ」で実施 ○2022 年１月 30 日実施の松浦市議会議員選挙のデータを用いて、何票得れば確実に当選できるかを考える。	１ 年生で学んだ数学の知識を使って、地域素材を活用した内容に取り組む姿勢を育む。	探究 スキル	１年	12 月 13 日 1 ｺﾏ	教育学部 前原由喜夫 准教授
理科	○「科学と人間生活」 ○松浦高校周辺の地形を学ぶ。	学校周辺の地形を学び、地形の形成要因を科学的に分析する。	探究 テーマ・ スキル	１年	3 月 実施	教育学部 林幹大助教
英語	○「英語コミュニケーションⅠ」で実施 ○姉妹都市理解 マッカイ市と松浦の姉妹都市締結についての英文を読み、理解を深める。	マッカイ市、松浦市間の姉妹都市協定への理解を通し、国際交流への理解及び興味関心を高める。	探究 テーマ・ スキル	１年	12 月 23 日 3 ｺﾏ	教育学部 中村典生教授
保健体育	○「保健」で実施 ○松浦市志佐町浦免・里免の白地図を活用して学校周辺の地形について理解を深め、オリジナルハザードマップを作成し、防災意識を高める。	課題発見力、プレゼンテーション力の育成を図る	探究 テーマ・ スキル	１年	12 月 10 日 1 ｺﾏ	教育学部 峰松和夫教授
商業	○「ビジネス基礎」で実施 ○商品開発をした「まつボーロ」のＰＯＰ広告作成を行う。	商品が売れる（販売につながる）仕組みを考える。	探究 スキル	１年	12 月 11 日 1 ｺﾏ	経済学部 津留崎和義 准教授 百枝製菓舗による商品提供

■地域素材を活用した地歴・公民の授業

■地域素材を活用した数学の授業

■地域素材を活用した英語の授業

■地域素材を活用した英語の授業

１－７　自己評価

（１）ルーブリックによる生徒自己評価

令和４年度に本校活性化ミーティング等で作成した、ルーブリック評価については、育成を図る資質能力等として、①情報理解・収集力、②プレゼンテーション力、③テーマ設定／課題発見力、④コミュニケーション力、⑤論理的思考力、⑥キャリア形成力、⑦ふるさと貢献力の７観点から生徒の自己評価を行った。

また、今年度は運営指導委員会で提案のあった、７観点とは別に、生徒自らが目標を定め、その自己評価も行った。（次のページに一例を示す。）

（２）教員による進捗状況チェックシートの活用

今年度は新たな取組として、生徒だけでなく、教員もファシリテーター等としてのチェックを発表会前後に行った。（次々ページに一例を示す。）

【成果】

・２年生では活動後に生徒が自己評価を行うことが習慣となった。
・毎回 SS～C の評価を行うと同時に感想等を記入できた。
・各段階の違いについては下線をつけることで、段階の違いが明確になった。
・発表会前には準備された７観点とは別に、生徒がそれぞれで目標を定めて、その評価も行った。

【課題／次年度に向けて】

・１年生にとってのルーブリックについて、これから検討していく。
・教員のチェックシートについては、１年間の活動においてオールマイティなチェック内容ではないので、修正・改善する必要がある。

＊今年度の検証については、第４章で説明する。

■生徒によるルーブリック自己評価の例

■ルーブリックによる評価…中間発表会までの「現在地」を自己評価しましょう。

評価の観点	知識・技能		思考力・判断力・表現力等			主体的に学習に取り組む態度		仕事図鑑完成までにあなたが身に付けたい力を、自分（個別）で設定してみましょう。（例）質問にしっかり答える力など
育成を図る資質能力等	情報理解・収集力	プレゼンテーション力	テーマ設定力 課題発見力	コミュニケーション力	論理的思考力	キャリア形成力	ふるさと貢献力	
評価規準	①入手した情報や知識・技能についてまとめることができているか。	②パワーポイントやポスターに、見やすさ等内容に工夫が見られ、発表姿勢（原稿なしの発表）や時間は適切か	③課題研究活動を「自分ごと」として捉えたテーマ設定ができているか。	④地域や班活動で協働する力がついているか	⑤今後の展望（提言・実践）が明確か	⑥課題研究活動と自分の進路がつながっており、その実現に向けて行動できているか。	⑦課題研究活動を通して、ふるさとに貢献しようとする態度が醸成されているか。	⑧身に付けたい力を考えることができているか。
段階（基準）								
C	先行事例研究やフィールドワーク等を通して得た新たな情報や知識についてについては、まとめることができていない。	パワーポイントやポスター等使って、聞き手に伝わりやすい工夫ができていない。	地域課題や学問的な課題を解決するための課題研究テーマが設定できていない。	班活動において、自分の役割や責任を果たし、自分と異なった考え方の他者を理解できていない。	課題研究活動の成果と課題を示すことができていない	自分の将来について考えることができていない。	ふるさとに貢献しようしていない。	**原稿をずっと見るような発表**
B	先行事例研究やフィールドワーク等を通して得た新たな情報や知識についてまとめようとしている。	パワーポイントやポスター等使って、聞き手に伝わりやすい工夫をしようとしている。	地域課題や学問的な課題を解決するための課題研究テーマを設定しようとしている。	班活動において、自分の役割や責任を果たし、自分と異なった考え方の他者を理解しようとしている。	課題研究活動の成果と課題を示そうとしている。	自分の将来を考えようとしている。	課題研究活動を通して、ふるさとに貢献しようしている。	**なるべく原稿を見ずに発表する**
A（ふつう）	先行事例研究やフィールドワーク等を通して得た新たな情報や知識についてまとめることができている。	パワーポイントやポスター等使って、聞き手に伝わりやすい工夫ができている。	地域課題や学問的な課題を解決するための課題研究テーマが設定できている。	班活動において、自分の役割や責任を果たし、自分と異なった考え方の他者を理解できている。	課題研究活動の成果と課題を示すことができている。	自分の将来について考えることができている。	課題研究活動が、ふるさとに貢献しようとする態度につながっている。	**原稿を見ずに発表する**
S	これまでの知識と先行事例研究やフィールドワーク等を通して得た新たな情報や知識についてまとめ、比較・分類ができている。	パワーポイントやポスター等使って視覚的な工夫を加えることができ、時間内にかつ原稿をあまり見ずに聞き手を見ながら発表ができている。	地域課題や学問的な課題を解決するために、「自分ごと」として捉えた課題研究テーマが設定できている。	班活動や地域において、自分の役割や責任を果たし、自分と異なった考え方の他者を理解できており、協働ができている。	課題研究活動の成果と課題を道すじを立てて表現することができている。	具体的な進路について深く考え、キャリア形成（進路実現）と結びつけた課題研究活動の計画を立てている。	課題研究活動とふるさとに貢献しようとする態度が発表会等を通して地域に説明できており、それが実践活動まで結びついている	**原稿を見ずに、前を向いて発表する**
SS	これまでの知識と先行事例研究やフィールドワーク等を通して得た情報や知識をまとめ、比較・分類した上で要・不要の取捨選択ができている。	パワーポイントやポスター等使って視覚的な工夫を加えることができ、身振り手振りを加え、時間内にかつ原稿に目を通さずに聞き手を見ながら発表できている。	地域課題や学問的な課題を解決するために、「自分ごと」として捉えた実現可能な課題研究テーマが設定できている。	班活動や地域において、自分の役割や責任果たし、自分と異なった考え方の他者を理解できており、リーダーシップを発揮しながら、協働ができている。	課題研究活動の内容を整理・分析し、成果と課題を道すじを立てた将来の展望を表現することができている。	具体的な進路について深く考え、キャリア形成（進路実現）に向けた計画を立て、その実現に向けた課題研究活動ができている。	課題研究活動とふるさとに貢献しようとする態度が発表会等を通して地域に説明できており、何度も実践活動にチャレンジできている。	**原稿を見ずに、前を向いて笑顔で発表する**

自己評価	B	A	A	A	A	B	A	S
感想	**少し資料に不足があったので、中間発表会までにはしっかり準備する。**							
自己評価	A	S	A	A	S	B	A	A
感想	**発表会後の参加者のメッセージカードに良い感想が多くて嬉しかった。資料がしっかりまとめられて良かった。**							

■教員による進捗状況チェックシート

■松浦高校まつナビ・プロジェクト　学びの振り返りチェックシート（２学年教員用）

お名前（　　）

伴走のかたち	中項目	小項目	全くできなかった	できなかった	時々行った	よく行った	具体的根拠（その数値を選んだ理由）
ティーチャー（教える）	計画性を高める	①活動の目的意識をもたせたか	1	2	③	4	基本的に活動の目的を最初に伝え、あとは達成するまで本人たちに任せていました。
		②具体的な計画を立てさせたか	1	2	3	④	毎回、進捗状況の確認と計画を立てさせました。
		③活動の進捗状況を確認できたか	1	2	3	④	〃
	知識・技能を高める	①知識や情報を提供できたか	1	2	③	4	基本的に情報収集は本人たちにさせました。
		②活動のスキルを提供できたか（調査方法・プレゼン手法）	1	2	③	4	県大生がほぼやってくれました。
		③活動の質を高めることができたか（アンケート結果の分析等）	1	②	3	4	ポスターはもっと質の向上ができたかな。
ファシリテーター（引き出す）	思考を深める	①クラッシーによる生徒の振り返りの確認や助言ができたか	①	2	3	4	クラッシーは一度も使っていません。
		②意見や考えの傾聴と考えの整理や言語化の支援ができたか	1	②	3	4	県大生や馬場さんが上手にやられていました。
		③別の情報やアイディアの提供ができたか	1	②	3	4	
コーディネーター（つなげる）	外部リソースとの接続	①協働できる専門家や地域リソースを紹介することができたか	1	2	③	4	基本的に本人たちで見つけて依頼していました。
		②活動を深めるための地域行事などを紹介できたか	1	②	3	4	特になし
		③振り返りによる学習の機会を確保することができたか	1	2	③	4	全体指導の際に振り返りができた。
メンター（精神的サポート）	勇気づけ	①生徒の活動に興味関心を示し、活動に向かっていけるよう声掛けができたか	1	2	3	④	常に声かけをしておかないと、すぐに別のことをやりだすので、声かけをかかしませんでした。
		②未知の状況にチャレンジできるように励まし、活動を後押しできたか	1	2	3	④	

１－８　松浦高校における事業の管理

地域科学科における、「資質・能力」の育成を目指した各教育活動の充実及び各教育活動の関連性の強化を図るため、PDCAサイクルに基づく組織マネジメントを以下の体制で推進した。

〇地域科学科・プロジェクトチーム

校長、教頭、プロジェクトリーダー、コーディネーター等

〇活性化ミーティング

プロジェクトリーダー（主・副）、コーディネーター、進路指導主事、商業科主任、各学年の担当者等

（１）プロジェクトチームによる活性化ミーティング

【成果】

①各教育活動の関連性を強め、「資質・能力」を育成する活動としていくための企画・調整（カリキュラム・マネジメント）の推進を図った。

②具体的な活動内容や目的の共通理解とマインドセットを行うために、毎週木曜日に活性化ミーティングのメンバーに管理職を加えた意見交換等を実施し、まつナビ・プロジェクト活動の充実を図った。

③学びアドバイザー（長崎大学　藤井佑介准教授）に、主にオンラインにて活性化ミーティング入ってもらい、活動について具体的なアドバイスをもらった。

④探究コーディネーターが現在の活動についての課題を提示し、それについて具体的に協議するような体制が構築できた。

【課題】

①各教育活動の目標をプロジェクトメンバーで共有し、それを各学年担当者から学年に伝えていく体制を整えることで、さらに教育活動を推進していく。

②協議が事務的な内容だけで終わることも多い。困り感等の共有とその検討が必要。

③教員間のファシリテート能力の格差がまだ存在する。

【次年度への反映】

①活性化ミーティングにおける、普通科改革に係る各事業や実践について、それぞれの区切りごとに検証を行い、改善案を考える。

②運営指導委員会・コンソーシアム会議における委員の意見等を踏まえ、各教育活動の改善案を検討する。

③全職員が参加する職員会議等の中で、活性化ミーティングの内容を全教員にフィードバックし、活動の目的の目線合わせを行う（情報・スキル格差を小さくする）。

１－９　３年間の総括【実施計画Ｉ】

育成を目指す「資質・能力」に基づき、教科等を横断する学びを含む、生徒の自己有能感を高める教育活動と学習評価を一体的に行うカリキュラムの研究開発について、以下のとおり整理した。

計画Ｉ	令和４年度	令和５年度	令和６年度
目標	各教育活動ルーブリック評価規準作成・実践・改善	キャリアプランの作成状況を踏まえたルーブリック評価基準の検証・改善・各教育活動への反映	地域科学科１回生のキャリアプラン実現に向けたプロセスの検証等による総括、次年度以降の計画策定
事業内容	○グループごとに課題設定を行い、課題研究構想発表会において発表した ○ルーブリックを作成し、各教育活動の振り返りの際に自己評価を行った ○「松高ポートフォリオ」を用いて、各教育活動の振り返りを行った	○自分たちの興味・関心に基づき課題を設定し、その解決策を発表した ○ルーブリックに基づいて、各活動の振り返りの際に自己評価を行った ○「松高ポートフォリオ」に、各活動の振り返りを記入した	○自分たちの興味・関心に基づき課題を設定し、その解決策を発表した ○ルーブリックに基づいて、各活動の振り返りの際に自己評価を行った ○「松高ポートフォリオ」に、各活動の振り返りを記入した
成果	○ルーブリック、「松高ポートフォリオ」を用いた評価により各教育活動の振り返りを行うことで、自らの学びの内容や深まりについての検証・改善ができた	○各プロジェクトの進捗状況を確認しながら、ルーブリックによる自己評価を行うことができた ○大学との協働により、身に付けさせたい資質・能力ごとにルーブリックを再構成することができた	○テーマ設定後の班編成の際に、担当教員と生徒がこれからの探究活動についてミスマッチがないか面談を行った ○身に付けさせたい７つの力をルーブリックにまとめているが、今年は生徒個人の目標をつくる取組を行った
課題	●生徒にとってわかりやすく、他者からの評価も取り入れやすいルーブリックへの改善を図る ●生徒が設定するテーマが、過去の実践テーマに引きずられる傾向が強い	●各プロジェクトに対する教員（ファシリテーター）による支援の在り方についての共通理解が不十分であるそのため、生徒に自らの成長等を実感させることが十分にできなかった	●探究活動の短期・中長期的な目標をしっかりと提示した教員間の共通理解が不十分である ●問題解決に必要なデータの収集・活用・分析力の育成が不十分である ●キャリア形成につながるような探究テーマに導くことが不十分である

【計画Ｉの３年間の総括】○成果、●課題

○ルーブリックによる自己評価について、従来の７つの項目だけでなく、新たに生徒自らが８つ目の目標を自分ごととして立てる試みは良かった。

○１年生による個人構想発表会の後、同じようなテーマの生徒で班編成を進めたが、令和４年から継続的に担当教諭と個人面談ができたことはとてもよかった。

●探究活動全般において、何のために、どういった目標をもって取り組めばよいかをより明確にし、生徒及び教員、地域が共通理解しておく必要があった。

●教員が担当する班に対するファシリテートの進捗状況を確認するためのシートを作成した。次年度以降、今年度のシートの分析を通して、より生徒への支援が円滑に行えるように準備する必要がある。

●まつナビ・プロジェクトの活動だけでなく、教育活動全般において、文字で整理させる必要があった。（振り返りの記録をしっかりキャリア形成につなげるしくみ作り）

２　実施計画Ⅱ

２－１　活動目標

中学校、大学等との協働による地域活性化への貢献

２－２　実施計画

地域及び学校活性化を図る教育活動等への支援体制（コンソーシアム等）の構築・充実

２－３　運営指導委員会

（１）運営指導委員会の体制

（２）　運営指導委員会の取組

所属	氏名	主な実績
無	佐々木　龍二	前長崎大学サテライトオフィス松浦コーディネーター、元松浦市立中学校長
長崎県立大学	本田　道明	学長補佐
鎮西学院大学	加藤　久雄	総合社会学部 多文化コミュニケーション学科　教授
西海みずき信用組合	前田　幸輔	地域振興室長（前日本政策投資銀行）
自営業	川浪　剛人	前まつうら創生推進室長
県企画部政策企画課	小柳　正典	企画監

①第１回：令和６年５月 24 日(金)　10：00～12:00　松浦高校会議室

〈委員からの主な意見〉

・本事業終了後は、学校運営協議会制度の導入を考えてみてはどうか。ある市内小学校はコミュニティ・スクールとなっているが、中学校にもあれば良いと思っている。

・中学校にもコミュニティ・スクールがあると良い。高校とのタテの連携が充実する。松浦版コミュニティ・スクールを考えてみてはどうか。

・ルーブリック評価については、中学校と共同研究してみては。

・生徒が進学・就職先でどのように「まつナビ・プロジェクト」の活動を活かしているのか、追跡調査をしてみては。

・就職については、県内就職率は上がっても、就職数は減少していることが課題。中興化成工業の奨学金のように、県もいろいろな制度に取り組んでいる。

・キャリア形成につながるテーマ設定をしてほしい。「まつナビ・プロジェクト」の活動が、生産性のない活動ではいけない。

②第２回：令和７年２月 10 日(月)　10:00～12:00　松浦高校会議室

〈委員からの主な意見〉

・他校との交流について、交流なくして発展なしと思っている。個人的には、生徒一人ひとりの交流が重要。

・松浦に関係のある企業等に市などから紹介をしてもらって行くことも、キャリアを感じることができていいと思う。
・市文化会館での発表会はとても良かった。生徒も生き生きと発表していた。論理的思考力が伸びていないのは課題。思考というのは言葉で思考するので、言語能力が重要だと考える。書くことを踏まえ考えること。読書を踏まえた言語活動が重要ではないかと思う。
・３つのワーク、「ネットワーク」、「チームワーク」、「フットワーク」については、まつナビでやっていると思うが、これに加えて、「デジタルワーク」、「デスクワーク」も重要であると考える。
・外部からの意見を取り入れながら、生徒の学びの幅も広がったと思う。しっかりブランドとして、地域に強い、進学に強いということを見せられたら。予算についても連携をしっかり作り、コミュニティ・スクールを活用してもらうことが重要であると考える。

【次年度への反映】
・コミュニティ・スクールの企画・運営について令和７年度初めまでに検討しておく。
・デジタルワークについては、生徒・教員向け研修会を実施する。
・生徒の活動費を確保する。
・論理的思考力を高めるために、教科指導も含め多角的な学びの計画を立てる。

２－４　コンソーシアム会議

（１）コンソーシアム会議の体制

所属	氏名	主な実績
松浦市	友田　吉泰	市長
松浦市議会	宮本　啓史	議長
松浦市教育委員会	黒川　政信	教育長
松浦市小中学校校長会	福永　　真	副会長（御厨中学校長）
松浦市商工会議所	稲沢　文員	会頭（稲沢鐵工代表取締役）
松浦高等学校ＰＴＡ	吉岡　健次	会長
松浦高等学校同窓会	藤田　英敏	会長
長崎大学教育学部	藤本　登	学部長
長崎県立大学地域創造学部	バロリ・ブレンディ	講師
株式会社エミネントスラックス	鴨川　秀人	課長
松尾農園	松尾　秀平	代表
長崎県教育庁高校教育課	田川耕太郎	課長

（２）コンソーシアムの取組

①第１回：令和６年５月 24 日（金）14:30～16:30　松浦高校会議室

〈構成員からの主な意見〉

・地域貢献には「ふるさとの歴史」を理解することが必要不可欠であるが、アンケート項目にそれを問う内容がない。

・郷土愛をもってもらう教育が高校でも必要。地域の祭りやイベントへの参加がふるさと愛につながるのではないか。

・志佐の精霊船などにおいても人手が足りなくなってきている。しかし、生徒も単純な人手扱いでは面白くないだろう。ちゃんと生徒が楽しめる参加のさせかたを考えなければならない。

・松浦はアジフライの聖地、例えば「松浦高校の生徒は全員アジを捌くことができる！」など特色を作るなどができないか。

・課題を見つけることが非常に大切。２年間の中で進めていくのは生徒にとっては長いのではないか？２～３のプロジェクトを生徒に取り組ませるなど、小さな成功体験を何度も体験させる方向性で進めてはどうか。

・生徒の精神的な面が教育されていない。（離職率が高いことから）成功体験をさせて、自信をつけさせる教育が必要では。

・大学進学者数を増やしてほしい。

・「恩返し探究」については、市や企業側からお題を出してもらって生徒が取り組むという形もアリなのでは。

・プロジェクトを成功させるマニュアルを生徒たちに作らせる。振り返りにも活用できる。創業させるのも力になる。（ビジネスコンテストなどへの参加など）

②第２回：令和６年２月 10 日(月)　14:30～16:00　松浦高校会議室

〈構成員からの主な意見〉

・高校でまつナビをしているのは特徴的だ。まつナビは教育課程の一部であり、多くは授業。その授業の中で、授業そのものを改革する必要がある。

・人間の考える力、ミックスしてできる力、それがまつナビでＡＩを活用できる人間をつくる。

・教師が良かれと思ってやっていたことが子どもの可能性を潰しているかも。企業や大人の役割として応援はするべきだと思うが、過保護になりすぎないことも重要であると感じる。

・地域への愛着だけではだめ。地域に対して何ができるかが大切。大学生との交流の場を増やしてほしい。

・もっと松浦高校の取り組みを中学生に知ってもらうことが必要。

・事業所に対してお願いするだけではなく、事業所に対してのメリットが提案できれば事業所も協力しやすい。

【次年度への反映】

・授業とまつナビ、学校設定科目「松浦学」の教科横断的な繋がりを強めていく。

・本校の取組について、中学校に知ってもらうために、発表会等に招待する計画を年度当初に立てる（年度途中であれば、中学校側の行事がすでに決まってしまっている。）

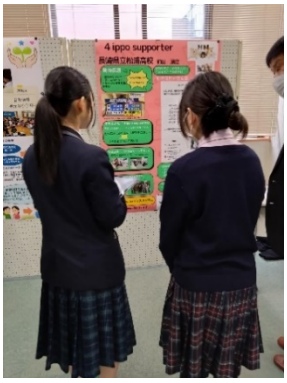
・教員のファシリテート力を上げるために、外部研修会や地域版未来会議に積極的に参加する。

２－５　学校外の組織等との協働

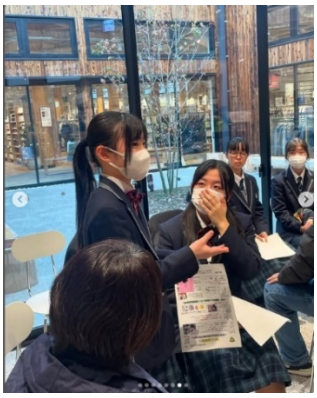
■生徒の外部コンテスト・地域イベントへの参加一覧

	外部コンテスト・地域イベント	主催・外部機関
８月	①「ながさき未来デザイン高校生ＳＤＧｓ推進事業」アントレプレナーシップゼミ発表会	①長崎県教育委員会
10 月	②松浦市水軍祭り（３年生有志がボランティア参加） ③松浦地域版未来会議（全学年有志が市民との意見交換会に参加）	②松浦市 ③松浦市
11 月	④松浦こども博（３年生有志がボランティア参加）	④松浦商工会議所青年部
12 月	⑤「ながさき未来デザイン高校生 SDGs 推進事業」アントレプレナーシップゼミ ⑥松浦市ビジネスコンテスト（アジのうろこからコラーゲンを抽出して、ハンドクリームを作成することを研究した班が最優秀賞に選ばれる。） ⑦SDGs QUEST みらい甲子園 ⑧全国防災ジュニアリーダー会議（全国から約 100 名の高校生・教員が参加） ⑨「ながさき未来デザイン高校生ＳＤＧｓ推進事業」アントレプレナーシップゼミ発表会	⑤長崎県教育委員会 ⑥松浦市 ⑦SDGs QUEST みらい甲子園実行委員会 ⑧諫早青少年自然の家 ⑨長崎県教育委員会
１月	⑩立命館宇治高校探究会（代表生徒２名がポスターセッションを行う。） ⑪マイプロジェクトアワード長崎サミット	⑩立命館宇治高校 ⑪認定 NPO 法人カタリバ
２月	⑫唐津市の無印良品前で「高校生自主防災組織」を立ち上げた班がイベント参加 ⑬ミライ企業 Nagasaki 推進事業	⑫無印良品唐津店 ⑬長崎県
３月	⑭SDGs QUEST みらい甲子園（「高校生自主防災組織」を立ち上げた班が、３月末の九州北部エリア大会に向けて準備を行っている）	⑭SDGs QUEST みらい甲子園北部エリア大会実行委員会

■松浦地域版未来会議③



■立命館宇治高校探究会⑩



■唐津市でのイベント⑫

２－６　まつナビ支援金制度

学校外組織や校外活動を中心に、生徒のまつナビ活動を経済的に支援することを目的として、松浦市より以下の条件等で上限額３万円程度の班活動費の申請ができる制度である。なお、生徒は次のページに示す「申請書」を作成し、担当教員のチェックを受けた後に、校長及び松浦市長へ提出して選考、支給される。なお、今年度から、「申請書」だけでなく、「報告書」も提出するようにした。

①支給対象

松浦高等学校の「まつナビ」の中で、地域課題解決や地域活性化のためのプロジェクトに取り組んでいるグループもしくは個人

②支給条件

申請書を提出の上、生徒による提案が、松浦市長及び松浦高等学校長から認められた場合に支給する。なお、申請にあたっては、必ず担当教員と相談の上、提出する。

③支給額

１つのプロジェクトへの支給上限額：原則 30,000 円程度（予算上限１会計年度 30 万円)。ただし、申請するプロジェクトの内容から上記金額を超える場合で、松浦市長及び松浦高等学校長が特に認める場合は 50,000 円を限度とする。

④支給方法

担当教員が、物品購入伺いを提出することで支給。

⑤申請方法

申請用紙に必要事項を記入し、担当教員の承認後、まつナビ担当に提出する。

⑥申請日

随時申請を受け付ける。申請が出てきたものを、月に１度程度のペースで松浦市及び松浦高等学校にて審査を行い、承認を受けた団体へ随時支給する。

⑦申請内容

・プロジェクトの概要及び目標　　・申請の目的
・支給金の使途　　・申請金額と内訳

⑧選考

申請のあったプロジェクトの中から、以下の条件を考慮して支給限度額内で選考する。

・地域課題解決や地域活性化のためのプロジェクトであること
・計画の緻密性　　・予算支給の必要性

⑨結果通知

プロジェクト担当者より、担当教員へ文書にて通知する。

■今年度の実践例

令和６年度　まつナビ支援金　申請書

令和６年５月 15 日

松浦市長　　友田　吉泰　様
松浦高等学校長　舟越　　裕　様

申請者名　Y.M
担当教員　U.S　印

下記のプロジェクトについて、「まつナビ支援金」を申請します。

記

申請グループ名	令和６年度まつナビ４班
解決したい課題等	松浦の水産業から廃棄を減らしたい。
プロジェクトメンバー名	（年・組・番号・名前） ２年１組　　番　Y. M ２年１組　　番　Y. Y ２年２組　　番　T. K
プロジェクトの目的	アジの捨てられるウロコを少しでも減らす。その学びの中で、食料についての知識、特にフードロスについて考える機会とする。
プロジェクトの内容・計画	アジのうろこからコラーゲンを抽出し、そのコラーゲンを保湿剤に活用した製品を作り、アジフライの聖地である松浦市で大量放棄されるうろこを再利用する研究を行う。
現在の進捗状況	うろこを使ってコラーゲン抽出の実験を進めている段階 最終的には保湿クリームの生産・販売まで行う。
申請金額	１０，５２５円（内訳生徒 7,200 円、引率 3,325 円）
支援金を必要とする理由	長崎大学の専門家に指導・助言してもらうため、長崎大学を訪問する。 （オンライン会議では伝わらない実験などを実際に見せてもらう）
支援金の用途（具体的に）	佐世保～長崎大学までの交通費
プロジェクトの協力者・協力団体	長崎大学　水産学部准教授 今後、商品化してくれる事業所を探す。

■今年度の実践例

令和６年度　まつナビ支援金　報告書

令和　６年　７月　26 日

松浦市長　　友田　吉泰　様
松浦高等学校長　舟越　　裕　様

申請者名　K.J
担当教員　T.K　印

下記のプロジェクトについて、「まつナビ支援金」の実績について報告します。

記

<table>
<tr><td>申請グループ名</td><td colspan="5">１年１組１班</td></tr>
<tr><td>解決したい課題等</td><td colspan="5">仕事図鑑を作成する</td></tr>
<tr><td>プロジェクトメンバー名</td><td colspan="5">（年・組・番号・名前）
１年１組　O.M　K.R　K.J　Y.A　計４名</td></tr>
<tr><td>申請額</td><td colspan="5">２，２４０円</td></tr>
<tr><td>実績額</td><td colspan="5">２，２４０円　（戻入額　　０　円）</td></tr>
<tr><td rowspan="5">実績内訳</td><td>用途</td><td>支出先</td><td>数量</td><td>単価</td><td>計</td></tr>
<tr><td>交通費</td><td>松浦鉄道</td><td>４</td><td>５６０</td><td>２，２４０</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="5">合計金額（　２，２４０　）円</td></tr>
<tr><td>支援金を利用してよかったこと</td><td colspan="5">取材する中で、仕事に対する思いや熱意が伝わった。患者さんのことを考えて、建物から設計しているので、通いやすい歯科だと思った。今後、インタビューをまとめて、いい仕事図鑑を作成したい。</td></tr>
<tr><td>支援金利用後も残った課題（なければ「なし」と記入すること）</td><td colspan="5">特になし</td></tr>
<tr><td>課題をどのように克服していくか（課題がある場合）</td><td colspan="5">特になし</td></tr>
</table>

＊領収証は、A4 の白い紙に添付して本報告書とともに提出すること。

【成果】

①班別活動を行っている２年生については、各班に長崎県立大学生に１～２名、伴走者としてついてもらい、オンライン等で定期的に進捗状況を報告しながら、効果的なフィールドワークや発表会に向けての最終的な取り組みなど、ステップアップ（主に活動の方向性）へのアドバイスをもらった。

②生徒が外部のさまざまな研修会や探究会に参加した。

③申請書だけでなく、報告書も作成することができた。

【課題】

①外部コンテストの参加は増えたが、福井県立若狭高校「若狭宇宙鯖缶」の研究や宮崎県立飯野高校「えびのスプラッシュフェス」のような生徒主体の地域イベントの開催など、「これぞ松高」というような継続的な活動がまだ生まれてきていない。

②校外活動に参加・チャレンジするために、令和７年度以降の生徒の活動費の確保。

【次年度への反映】

①医療機関や保育園等、生徒一人ひとりのキャリア形成を支援するために連携先の「開拓」を進める。

②生徒のキャリ形成力を高めるために、地域との連携の目的を明確にしながら、年間計画作成に取り組む。

③生徒が外部コンテスト等に自主的・積極的に応募して、評価を得られるように、研究テーマに応じたコンテストを年度当初に紹介する。

２－７　コーディネーターの活動とその成果と課題

令和６年度は２名のコーディネーターの配置を行った。配置した人材の役割や業務内容は以下の通りである。

・大内康仁氏（元市内中学校校長）：主に中高連携中心
・馬庭亜由氏（近隣市役所に企業から派遣）：主に大学連携

１．市内小中学校との連携

（１）中高連携授業や学校説明会の実施

【成果】

①市内の小・中学校校長研修会と連携を図り、各校での生徒及び保護者向け学校説明会を実施するとともに、各中学校の進路指導担当者や担任との意見交換を行った。

②松浦市内だけに限らず、市外の中学校も訪問し、昨年よりも早い段階から生徒募集に係る学校説明会を実施した。

③株式会社ハッシャダイの協力（伴走）の下で、中高合同の講演会・研修会の企画を立てることができ、中高生の企画・運営チームでその内容を検討することができた。

④今年度より新規に探究活動全般を担うコーディネーターが入ったことで、生徒と地元

事業所について具体的かつ継続的な繋ぎを行うことができた。

⑤毎週水曜日の生徒の探究活動の事前、事後について、教員は積極的にコーディネーターに活動の助言を仰いだり、生徒支援の具体的な方法などを質問したりするなど、年間を通して有効活用できた。

【課題】

①中学校教員とのより密な情報交換を行うこと。

②中学生の保護者に対する地域科学科の魅力を浸透させること。

③地域や外部機関とのつなぎだけでなく、探究活動に不安や停滞のみられる教員と生徒間をつなぐ必要がある。

【次年度への反映】

①教科指導に関する中高が連携した研修会および公開授業の実施。

②小・中学校教員および保護者向けの説明会の効果的な開催。

③定期的なコーディネーターと生徒、教員といった三者意見交換会の実施。

（２）課題探究構想・中間・最終発表会の参観

【成果】

①２年生による課題研究発表会を、地域科学科１年生全員が参観した。また、市長、市教育長、市議会議員および市役所職員、本事業管理機関、他校生徒等が参観した。

②校内における各種発表会に保護者や地域住民、大学生等を招いて継続的な指導・助言を受けられる体制を構築できた。

【課題】

①地域の方々や保護者参加がまだ少ない。

②最終発表会で高校３年間の探究活動が終了と考えている生徒・教員が多い。生徒の「進路実現」が最終目標であることのマインドセットが必要。

【次年度への反映】

①課題探究発表会を広く地域に公開する。

②発表会などの後日配信について案内を増やし、地域の認知度を高める。

③課題探究活動について中学生と意見交換できる場を設定する。

④市内中学生が参観できる環境づくり（日時などを年度当初に中学校側に伝える）。

（３）コーディネーター（大内氏）による市内小中学校との連携における成果検証・評価

①中高連携授業や学校説明会の実施

【成果】

・市内の小・中学校校長研修会、教頭研修会と連携を図り、各校での生徒及び保護者向けの学校説明会を実施するとともに、各中学校の進路指導担当者や 3 年担任との意見交換を行った。

・松浦市に隣接する県外、市外の中学校を訪問し、学校の情報提供を行った。

・市内全中学校に中高合同で「HASSYADAI 講演会」と高校生をファシリテーターとするワークショップを実施した。
・高校の物理の授業を中学校で実施した。

【課題】
・中学校教員とのより密な情報交換を行うこと。
・中学生の保護者に地域科学科の魅力を浸透させること。
・市外の中学校における学校説明会の実施を増やすこと。

【次年度への反映】
・中学生及び保護者向けの学校説明会の早期開催と内容の充実。
・市外の中学校との連携を深化し、魅力を伝える機会をつくる。

②課題研究発表会の参観

【成果】
・２年生の課題研究発表会を地域科学科１年生が参観した。
・校内の中間発表会、本発表会に地域住民や大学生を招く体制ができた。

【次年度への反映】
・課題研究発表会に隣接する中学校生徒の参観を依頼する。
・課題研究発表会を幅広く地域住民に公開する。

（４）地域との連携における成果検証、評価

①松浦商工会議所青年部（松浦 YEG）との連携

【成果】
・松浦 YEG の定例会にて、「まつナビ・プロジェクト」について説明会を行い、「まつうら高校応援団」の参加依頼を行うことができた。
・松浦 YEG が主催する「松浦こども博」に３年生が「ふるさと恩返し探究」として参加をした。
・２年生の班別探究活動において、松浦 YEG の会員である不動産事業者と建設事業者の協力のもと、「防災ベンチ」の制作を行った。

【課題】
・身近な地域の大人でもある松浦 YEG の取り組みについて生徒が知る機会が少なかった。

【次年度への反映】
・継続的な活動にするために、松浦 YEG とのコミュニケーションを定期的に行うことを検討する。

②「まつうら高校応援団」の活動に向けた協力依頼

【成果】

・生徒が自ら地域の課題を発見・解決していく地域課題解決型探究学習「まつナビ」にかかる課題解決過程に、地域の方から直接助言を得られるようになった。

・「松浦再発見研修会」「まつうら未来講演会」「仕事図鑑づくり」「インターンシップ」等に幅広く協力をいただいている。

【課題】

・生徒に育みたい資質・能力の育成といった教育の目標や地元の魅力等が浸透する機会を増やしたい。

【次年度への反映】

・「まつナビ」を充実し、課題探究過程において、まつうら高校応援団の支援をいただきたい。

・「まつナビ」にかかる生徒の活動の様子を知っていただく機会を増やす。そのために、活動計画の案内を確実にする。

（５）探究活動を担当するコーディネーター（馬庭氏）の活動実績

実施項目	内容
授業内での生徒への壁打ち	「まつナビ」の時間における、生徒への助言。アイディアの引き出しや論理展開の修正、取り組みに対する相談。
生徒が企画したイベント実施に向けた伴走	「まつナビ」の中で生徒が企画・参加するイベントや交流会などの調整、生徒への助言。（スイーツカフェや東京大学との交流会など）
生徒が企画したイベント当日のサポート	上記のイベントの当日の運営の補助や、生徒への助言、ファシリテーションなど。
先生方との調整	「まつナビ」の全体のカリキュラムに対する助言やサポート、各チームの生徒や動きに関する情報共有。
外部連携における交渉・相談窓口	松浦市内外の連携先との調整など。主に、メールやオンラインによる調整や、事業者への訪問など。
外部連携にかかるイベントサポート	プレまつナビや恩返し探求、その他の学校全体での連携事業における、企画や調整、当日の運営サポートなど
慶應 SFC との連携事業にかかる調整	来年度に向けた SFC との連携事業や修学旅行における企画や調整。
松浦市との調整	月例会の実施及び会の運営、その他企画における調整。
まつラボのサポート	外部との連携や企画、調整、運営のサポート。
外部コンテスト出場に向けたサポート	コンテスト出場に向けた書類やプレゼンのブラッシュアップ。

【成果】

・昨年度に比べて多くの外部コンテストや発表会等に参加を行った。

・松浦市との月例会の定例化により、本校と松浦市との連携や協働が充実した。

・長崎県立大学の学生によるオンラインでの伴走を複数回行うことで、生徒の探究学習における思考の整理を行うことができた。

【課題】
・教科横断的な学習、生徒の探究を通したキャリア実現に向けた教員間の連携を促すことができなかった。
・プレゼンテーションの方法やワークシートの見直しなど、生徒に対するスキルアップ講座の不足。
・班別探究活動をしている各班に対して、均等した壁打ちの実施ができなかった。（時間、機会など）
【次年度への反映】
・教員間で探究について話し合える環境作りを行う。
・年間スケジュールの見直しを行い、探究活動に必要なスキルを身につけられる講座の組み込みや、それを補うコンテンツの検討を行う。
・班別探究活動における担当教員が担当班に対して、壁打ちを行えるように、教員向けの講座・研修の機会を設けることを検討する。

２－８　新学科設置の関係者への説明及び成果普及のための活動実績

（１）生徒・保護者対象
【成果】
①近隣の中学校だけでなく、市外や隣県の伊万里市を対象とした学校説明会を実施し、地域科学科の学びの特徴に関する説明及び質疑応答をとおした疑問解消の取組。
②オープンスクールにおける生徒による「まつナビ・プロジェクト」の実践発表及び地域科学科の特色の説明。
③ホームページやＳＮＳ等による地域科学科の活動に関する情報発信。
④コーディネーターと中学校との連携を密にした情報交換。
【課題】
①地域科学科の理解を深めるために中高の教員間の情報共有の機会が足りない。
②地域科学科に対する中学生の理解を深めるために、中学生と高校生の合同授業や探究活動のコラボレーションの機会がまだ不足している。
【次年度への反映】
①地域科学科における学びの魅力とこれまでの成果について、具体的に中学生や保護者にもわかりやすく具体的に継続的に説明していく。
②松浦市の協力の下、市内中学生に意識調査等を実施し、本校が「選ばれる学校」になるための継続的な分析等を行っていく。
③中学生に２年生の最終発表会（課題探究発表会）を参加してもらい、観覧だけでなく中学生の「ふるさと学習」の意識を高めるために、代表生徒に発表してもらう。

（２）地域住民等対象

【成果】

①ポスターやチラシなどを使った「地域科学科」の周知徹底。

②地域課題探究学習「まつナビ・プロジェクト」を活用した情報の発信。

③進学実績等を横断幕にして、校門付近に大きく掲示。

④地域科学科の取組が進路実現につながることが認知されるようになった。

【課題・次年度への反映】

①「まつナビ・プロジェクト」の成果・普及をとおして入学志願者増に結びつける。

②松浦高校の教育活動に興味・関心をもってもらうために、「まつナビ・プロジェクト」発表会において地域住民等の参観者を増やす。

（３）県内外の高校対象

本校を訪問した以下の高校に新学科の状況等について説明

６月 11 日（水）	佐賀県立伊万里実業高校
８月 28 日（水）	兵庫県立尼崎高校　青森県五所川原第一高校
10 月９日（水）	島根県立江津高校
１月 22 日（木）	熊本県立小国高校
２月　５日（水）	福岡県立柏陵高校（大雪のため中止）
３月　７日（金）	愛知県立成章高校

２－９　国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

【成果】

①本事業の指定校となり、生徒の幅広い課題探究活動が可能となった。また、松浦市や地域の事業所等の職員が生徒の活動に伴走したり、アドバイザーとして専門的な助言を多くいただいたりした。

②松浦市長を中心としたコンソーシアム会議等、地域を巻き込んだ協力体制や生徒の教育活動を支援する持続可能なシステムは構築された。

③まつうら高校応援団の設置で、生徒のフィールドワークやインタビュー調査等の校外活動の回数が増えた。地域の支援・協力がさらに活性化された。

【課題】

①特定の事業所に、生徒の活動が限定されている。

②学校（生徒）と地域との協働活動におけるマッチング体制の構築。

③次年度以降の「まつナビ・プロジェクト」推進のための組織及び生徒の活動費の確保。

【次年度への反映】

＜学校外との連携＞

①これまでのコンソーシアムでの取組を継続し、より一層地域との連携を深め、持続可能

な教育活動推進のための組織を構築するため、令和７年度からコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を導入する。

②大学や中学校の連携体制の再構築を図る。特に、大学との連携については、研修講師の謝金・旅費等の確保について検討する。

③「まつうら高校応援団」の協力支援団体を増やし、地域からの支援を幅広く受けられる体制づくりを進めて、生徒の「主体的」な探究活動の充実を図る。

＜校内体制の整備＞

①「活性化ミーティング」を継続して設置し、具体的な活動内容や目的の共通理解及びスキルを身に付けさせるための指導法の向上や、生徒に伴走するマインドセットの醸成を図り、まつナビ・プロジェクト活動の充実を図る。

②ＤＸハイスクール事業と「まつナビ」のテーマ設定の関連性を深めるために、カリキュラムの改善を進める。

③令和７年度以降のコーディネーターの継続的な配置及びさらなる人的資源の活用（地域おこし協力隊等）について検討する。

④「まつナビ・プロジェクト」に係る生徒の活動費の在り方について検討する。

２－１０　他の事業との関係

【成果】

①令和４年度に終了した「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の成果を踏まえた継続的な取組の実践。

・今後のルーブリック評価について、運営指導委員会で具体的な意見をもらった。

・コーディネーターを中心とした、小高・中高・高大連携の強化。

・県北高校生探究フォーラムの開催、及び NPO 認定法人カタリバ主催の「学校横断型探究プロジェクト」において、たくさんの生徒間交流が実現した。

②立命館宇治中学・高等学校の WWL コンソーシアムに昨年度から加盟し、１月 23 日(木)～25 日(土)の探究研究会に生徒２名が参加した。（参加生徒は最終日にポスターセッションを行った。）

③三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティングによる「高校魅力化評価システム」の導入３年目で、より客観的なデータによる分析を行うことができた。

【次年度への反映】

①「高校魅力化評価システム」による評価結果を精査し、カリキュラム開発の方針に反映させていく。

②他校生との交流については県内のみならず、県外の高校とも継続的に行っていく。そのための活動費を確保するための検討を行う。

２－１１　３年間の総括【実施計画Ⅱ】

【計画Ⅱ】コンソーシアムを中心とした、中学校と高等学校の学びの連携・交流及び高等学校と大学・企業等の連携による、SDGｓを踏まえた地域課題解決型探究活動及びキャリア形成力の涵養活動を組織的に支援する体制の構築・運営の充実について、以下のとおり整理した。

計画Ⅱ	令和４年度	令和５年度	令和６年度
目標	中高・ 高大職連携の推進とその効果等の検証に基づく連携体制の在り方を含む改善	前年度の検証等を踏まえた支援体制の充実と生徒の探究活動への支援の検証・改善	地域・学校活性化に向けた、３年間の生徒支援の検証等による総括、次年度以降の計画策定
事業内容	○中学校社会科の中高合同授業に本校１年生が参画した ○商工会議所青年部が主催するイベントに生徒会役員が企画から参画した ○地域科学科生徒が、大学生の卒業論文発表会へ参加した	○長崎大学の支援のもと、地域素材を活用した授業づくりに取り組んだ ○発表会に地元の社会人や長崎県立大学の学生等を招き、多方面から助言をもらった ○小・中学校でプロジェクトの成果を発表した	○長崎大学の支援のもと、地域素材を活用した授業づくりに取り組んだ ○発表会に地元の社会人や長崎県立大学の学生等を招き、多方面から助言をもらうことができた ○各班の活動に大学生に伴走してもらい、探究活動を充実させることがきた
成果	○コンソーシアム構成員との協働による実践活動の充実を図ることができた ○校外での活動の機会を増やしフィールドワーク等による地域との交流の機会が増えた	○７教科において地域素材を活用した授業づくりに取り組み、中学校との合同授業（地歴・社会）を行うことができた ○大学生には複数回発表会に参加してもらうことができたまた、大学訪問を実施することができた ○生徒と地域リソースとをマッチングする「まつうら高校応援団」を創設した	○各教科地域素材を活用した授業づくりに取り組み、地歴公民科では、中学校との合同授業も行った ○大学生１，２名を各班に入ってもらい、探究活動の進捗状況などについての壁打ちを３回以上実施できた ○「まつうら高校応援団」にはフィールドワーク等で多くの支援をもらった
課題	●生徒の研究と地域のリソースとのマッチングが不十分である ●課題解決に必要なデータの収集・活用・分析力の育成が不十分である ●中高教員間の情報共有を増やす	●課題設定力や課題解決に必要なスキル（データ収集・活用・分析力等）の育成が不十分である ●「まつうら高校応援団」の運用など地域との連携の在り方を引き続き検討していく必要がある ●大学による支援がその場限りとなっており、より継続性のある関係を構築する必要がある	●情報理解・収集力を高めるためのスキルの育成が不十分である ●地域素材を活用した授業づくりを行う中で、大学による支援を継続性のあるものにしていく必要がある ●探究活動を進めるための地元事業所とのマッチングがまだ不十分である

【計画Ⅱの３年間の総括】○成果、●課題

○長崎大学の支援のもと、地域素材を利活用した授業改善が進んだ。

○長崎県立大学生の伴走、特に発表会前後のオンライン会議や発表会の参観等により、生徒に多くの助言をもらうことができた。

○「まつうら高校応援団」には、１年生の仕事図鑑インタビュー、２年生のフィールドワークやインターンシップ（３月 17 日～19 日に実施）でお世話になった。いずれの訪問でも協力的な御支援をいただいた。

●探究活動を進めるための地元事業所とのマッチングについては今後も課題であり、探究コーディネーターからと連携し、生徒へ情報提供をしていく必要がある。

●データを収集し、それを理解してまとめていく活動や論理的な思考が苦手な生徒が多いので、これを克服するための研修会などを計画する。

３　実施計画Ⅲ

３－１　活動目標

県内外の「地域高校」との連携等による学校活性化

３－２　実施計画

県内外の「地域に根ざした高校」のネットワークの構築と協働による、参加各校の活性化

３－３　活動内容

（１）「地域に根ざした高等学校」のネットワークを構築した上で協働研究等を実施

〇目的

・観点別評価に関する研修

〇日時・場所：令和６年 11 月 22 日（金）　14:30～16:30／松浦高校コモンホール

〇対象：本校教員・県内の教員

〇講師：福井県教育庁高校教育課参事（高校改革担当）渡邉　久暢　先生（国語科）

（２）長崎県立大生による伴走

〇目的

・最終発表に向けたより精度の高い発表内容にするため、長崎県立大生の指導を受けながら、フィールドワークの振り返りを充実させる。

・大学生には高校生のチームに第三者の立場からアドバイスをしていただくことで客観性のある発表内容に近づける。

〇オンラインでの伴走の日時

・６月 19 日（水）13:50～15:40　　中間発表会　参観

・７月３日（水）　13:50～15:40　　オンライン　大学２年生、３年生

・８月 28 日（水）13:50～15:40　　オンライン　大学２年生、３年生

・10 月９日（水）　13:50～15:40　　オンライン　大学３年生

・10 月 23 日（水）12:30～16:00　　課題探究発表会　参観

〇　７月３日（水）　中間発表会の振り返り、フィールドワークの準備

・これからどのようにして実践活動へつなげていくか

・活動を進めにあたって「困りごと」の共有と助言。

〇　８月 28 日（水）　フィールドワークの振り返り

・フィールドワークでどんなことをしたのか。

・どんなことが分かったのか。

・最終発表に向けて足りないことは何か。

〇　10 月９日（水）　最終発表に向けたプレ発表

・当日は各班が１班ずつ模擬発表。

・大学生は各班についていただき、発表の前後でのアドバイスをお願いします。

（３）生徒間交流

①長崎県アントレプレナーシップゼミ 2024（Summer/Winter）

日時：令和６年８月 20 日（日）／令和６年 12 月 22 日（日）

内容：地域課題の解決や地域の魅力化について、参加した県内の高校生がチームに分かれて協議し、多様なビジネスプランを開発した。参加した本校の生徒は他校の生徒と積極的に関わりながら、地域創成について探究する力を身に付けた。

②全国防災会議（全国防災ジュニアリーダー育成合宿）

日時：12 月 20 日(金)～22 日(日)

内容：本校１年生が２名参加。２泊３日で雲仙普賢岳災害等を学び、防災や減災について学びを深めた。また、全国各地から集まった高校生に対して、開催権の長崎県の代表として開会行事などを企画・運営した。

■防災ワークショップの様子

③学校横断型探究

日時：１回目　令和６年 10 月 10 日(木)

２回目　令和７年　１月 23 日(木)

内容：ＮＰＯ認定法人カタリバによる、全国の小規模校を中心とした高校との生徒間交流に参加。10 月と１月の２回、本校生徒１年生全員が探究活動の課題や成果について、他県高校生と個別にオンライン協議を行った。

■オンライン協議の様子

④県北探究フォーラム

日時：令和６年 12 月 22 日(日)

12:30～13:40（70）　探究活動に関するポスター発表

13:55～15:25（90）　生徒、サポーター、観覧者との「対話」

講師　(有)ペンダコ代表　日賀優一　様

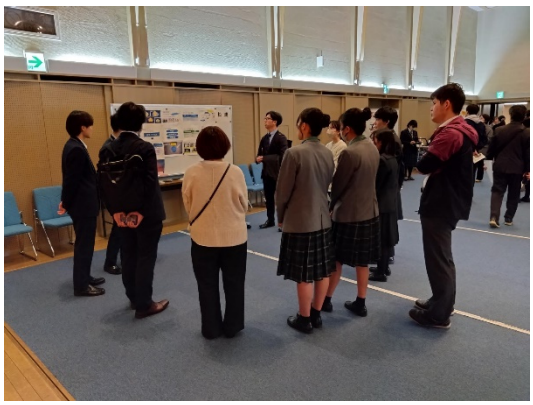
15:35～16:20（45）　講演　講師：ベネッセ教育総合研究所主席研究員

山下真司　様

16:20～16:40（20）　クロージング：講演の振り返り、１日の振り返り

内容：日ごろから各学校で取り組んできた探究活動について、学校の垣根を超えた場での発表すること、サポーター等との質疑応答などを通して、探究活動の深まりや広がりを促すとともに、探究学習の面白さを実感することを目的として、アルカス佐世保イベントホールで、県北６校（佐世保南高校、佐世保北高校、

佐世保西高校、猶興館高校、宇久高校、本校）が集まり、探究フォーラムを実施した。ワールドカフェ方式のワークショップにおいて、他校（各校１名）との代表者会をつくり、オンライン会議を通じて、当日のテーマについて協議を行うことができた。また、当日の進行も全て生徒を中心に行った。



■ポスターセッション

■探究ワークショップ

⑤立命館宇治中学校・高等学校公開研究会（探究）

日時：令和７年１月 24 日(金)・25 日(土)

内容：立命館宇治高校で行われている探究活動に関する講話や生徒の発表を参観するとともに、本校の生徒も自らの探究活動のポスター発表を行った。

■ポスターセッションの様子

⑥全国高校生マイプロジェクトアワード 2024 長崎県 Summit

日時：令和７年１月 26 日(日)

内容：県内の高校生がグループに分かれ、それぞれが進めてきた探究活動について発表し、様々な経歴を持つ大人のサポーターを交えた対話を行った。専門的な視点を踏まえた助言をもらい、生徒の探究活動の深まりにつながった。

■発表と質疑応答

⑦松浦市ビジネスコンテスト

日時：令和６年 12 月 25 日(水)プラン発表
令和６年 12 月 26 日(木)表彰式

内容：松浦市主催のビジネスプランコンテスト。本校からは、アジのウロコの保湿成分に含まれるコラーゲンに着目した班が応募し、２月 25 日実施の県のコンテスト（ミライ企業 NAGASAKI）へ進んだ。

■みらい企業 NAGASAKI でのプレゼン

⑧佐賀県唐津市無印良品主催「防災会議」

日時：令和７年２月 15 日(土)14:00～

内容：無印良品唐津店主催の防災に関する会議。唐津市内の高校と本校の防災班等が日頃からの防災への備え等について協議を行った。

■防災班の発表

⑨SDGs QUEST みらい甲子園

日時：令和７年３月 27 日(木)

内容：全国の SDGs について探究する高校生が、SDGs の目標達成に向けた様々なアイディアを考える。本校からは「住み続けられるまちづくりを」の目標達成を目指し、防災ベンチの製作・自主防災組織の立ち上げを行ったチームが参加した。

■防災ベンチの披露

【成果】

①班別活動を行う２年生については、班ごとに長崎県立大学の学生１～２名に伴走者としてついてもらい、オンライン等で活動の進捗や悩みについて報告・相談するとともに、効果的なフィールドワークや発表に向けた取り組みなど、活動の方向性に関するステップアップへのアドバイスをいただいた。

②生徒が外部のさまざまな研修会や探究活動に参加した。

・長崎県教育委員会主催の「ながさき未来デザイン高校生 SDGs 推進事業」アントレプレナーシップゼミに２年生（夏）と１年生（冬）に参加。

・全国防災会議の２泊３日のキャンプに１年生２名が参加（12 月）。
・松浦市ビジネスコンテストに２年生の３チームが参加。アジのウロコから抽出したコラーゲンを利用したハンドクリームの作成について探究したチームが最優秀賞に選ばれ、２月実施の長崎県主催「みらい企業 Nagasaki」推進事業のビジネスプランコンテストへ進出した。（12 月・２月）
・立命館宇治中学校・高等学校の公開研究会（探究）に生徒２名が参加しポスターセッションを行った。（１月）
・認定 NPO 法人カタリバ「マイプロジェクトアワード長崎県 Summit」に２年生の２チームが参加した。
・SDGs QUEST みらい甲子園に、「防災」をテーマとした２年生のチームが参加。
九州北部エリアの１次審査を通過し、３月の最終審査に向けた準備を行っている。

③学校横断型探究として、NPO 認定法人カタリバによる、全国の小規模校を中心とした高校の生徒間交流に１年生が参加。

【課題】

①１年生での仕事図鑑作成や２年生でのフィールドワーク・インターンシップ等においては、まつうら高校応援団から多くの支援を受けているが、訪問先の事業所が重複してしまうことがある。生徒の興味・関心を広げるとともに、応援団の構成事業所の拡大や構成事業所以外の事業所との連携を検討していく必要がある。

【次年度への反映】

①生徒一人ひとりのキャリア形成を支援するために必要な連携先の「開拓」を進める。

②生徒のキャリア形成力を高めるために、地域との連携の目的を明確化しながら年間の活動計画の作成を行う。

③生徒が外部コンテスト等に自主的・積極的に応募し、学校外においても多様な支援・評価を得られるように、年度当初に生徒の研究テーマに応じた外部コンテストを紹介する。

３－４　３年間の総括【実施計画Ⅲ】

【計画Ⅱ】県内外の「地域に根ざした高等学校」のネットワークの構築と、地域・学校活性化を目標とした学びを進める体制・運営の研究開発について、以下のとおり整理した。

計画Ⅲ	令和４年度	令和５年度	令和６年度
目標	「地域高校」ネットワークの構築・交流開始	「地域高校」ネットワーク参加校における協働・活動の推進	「地域高校」ネットワークの３年間の取組の検証等による総括、次年度以降の計画策定
事業内容	○県内県立高校９校とのネットワーク構築を行い、教員研修を実施した ○立命館宇治中学・高等学校の WWL コンソーシアムに加盟できた ○宮崎県立飯野高校主催の全国グローカルリーダーズサミットに生徒が参加した	○県内の高校教員や地域住民も巻き込んで外部講師を招聘した研修会（３回）を実施した ○立命館宇治中高の WWL コンソーシアムのフォーラムに校長が登壇し参加するとともに、情報交換を行った ○宮崎県立飯野高校主催のグローカルリーダーズサミットに、外部の研修会に生徒が参加した	○生徒間交流の一環として県北高校生探究フォーラムを実施６校参加でポスターセッションやワークショップを行った ○立命館宇治中高の WWL コンソーシアムに参加し、本校生徒が発表した ○全国防災会議に１年生２名が参加本県開催であったため、ウェルカム行事などをその中心となって企画・運営した
成果	○「地域高校」との研修を通じて、学校の魅力や探究活動等の情報共有ができた ○生徒のキャリア意識の高揚を図ることができた	○研修会を通じて、学校の魅力化や探究活動に関する情報共有ができた ○外部との交流によって、生徒の探究活動に対する意識やキャリア意識の高揚を図ることができた	○県北高校生探究フォーラムを実施して他校生との交流によって、生徒の探究活動に対する意識やキャリア意識の高揚を図ることができた ○専門家による評価についての研修会を他校職員も参加して実施した ○全国の高校がオンラインでつながる、カタリバ主催の「学校横断型探究プロジェクト」で１年生全員が、生徒間交流ができた
課題	●情報共有後の担当者間での振り返りの時間の不足 ●参加各校の取組内容に踏み込んだ情報共有と意見交換の時間設定が不十分	●研修会後の教員間、参加者間での振り返りや意見交換の時間を十分にとれなかった ●本校を中心とした生徒交流を実施できなかった	●これまで連携してきた県内の「地域に根ざした高等学校」との関係を継続しつつ、各校魅力化に向けた生徒間交流等の在り方を再検討する ●外部（校外）コンテスト等で高評価を得るような探究活動を増やす

【計画Ⅱの３年間の総括】○成果、●課題

○令和５年度は、教員間交流のための研修会を実施し、令和６年度は「県北高校生探究フォーラム」を県北高校６校による、他校生との交流のために、相互に探究活動発表（ポスターセッション）、ワークショップ等を行うことができた。

○宮崎県飯野高校や WWL コンソーシアムに参加している立命館宇治高校に生徒を引率して、本校の活動を発表できた。このように県外生との交流も徐々に増やすことができた。

○全国の高校がオンラインでつながる、カタリバ主催の「学校横断型探究プロジェクト」で１年生全員は生徒間交流ができた。オンラインでのトラブルがあった生徒は、その解消法も学ぶことができ、貴重な体験ができた。

●令和６年度は生徒間交流を進めることができたが、地域に根ざした高等学校との教員間交流（意見交換会）を継続的に実施すべきだった。

●外部コンテストの参加は増えたが、福井県若狭高校「若狭宇宙鯖缶」や宮崎県立飯野高校「えびのスプラッシュフェス」の開催のように、「これぞ松高」というような活動がまだないので、そのような探究活動を作っていく必要がある。